

中国業務通説

妹に薬飲ませ・・・失った記憶

2017年4月17日付の朝日新聞に載った投書だ。

村上敏明さんは1934(昭和9)年、京都府亀岡市に生まれた。村上さんは1938年4歳頃、両親と弟、妹の家族5人で満州に移住した。市役所に務めていた父親が「満州に行くと給料が2倍になる」という誘いの言葉にに応じて新天地・満州に向かったのだ。初めは満州国の首都・新京(今の吉林省長春市)で暮らし、1942年に四平市に移住した。

家族5人は四平市で1945年8月15日の敗戦を迎えた。翌年の1946年に家族全員で日本に引き揚げることになった。しかし、妹

は幼いので、帰国途中の足手まといになるとの理由で命を絶たれた。母も病にかかり、帰国途中の足手まといになるとの理由で命を絶たれた。無言の圧力、暗黙の命令が家族に身内を殺させたのだ。自ら望んで娘に毒を飲ませる母はいないし、母に毒を飲ませる子もない。家族5人のうち、女2人は生きて日本に帰れず、男3人が生きて日本に帰った。村上さんと同じことを経験した満蒙開拓民はほかにも数多くいただろう。

満州開拓民は中国軍ではなく、日本軍に殺され、死を強いられた。沖縄県民は米軍ではなく、日本軍に殺され、死を強いられた。沖縄戦で日本軍による沖縄住民殺害、久米島守備隊住民殺害があり、日本軍による沖縄県民へ自決の強要にチビチリガマ集団自決決があった。

この投書は大きな反響を呼んだ。2017年8月15日のBuzzFeed Newsに村上さんのインタビュー記事が載った。記事の一部を紹介する。

妹の最期・・・家のなかで、数人の大人たちと弟2人に囲まれて母親が抱きかかえた妹にスプーンを使って便に入った液体を飲ませた。

妹は、スプーンですくった透明の液体をなめると、閉じていた目をくっと見開いて、私をにらんだんです。

そしてそのまま、息絶えた。

飲ませたのは、毒だった。

妹に薬飲ませ・・・失った記憶

無職 村上 敏明
(京都府 82)

敗戦翌年、1946年の春、旧満州(中国東北部)四平で、中国共産党軍と国民党軍は内戦中だった。父は徴兵されて音信不通。砲火の中、母子5人で暮らした。

7月、日本引き揚げが決まり、家に日本人会の男性数人が来た。1歳の一番下の妹について、「長い旅に耐えられないから殺しなさい」と言い、液体の毒漿を渡された。母が抱き、小学6年の長男の僕がスプーンでのませると妹は死んだ。その後の幾つもの記憶を僕は失った。

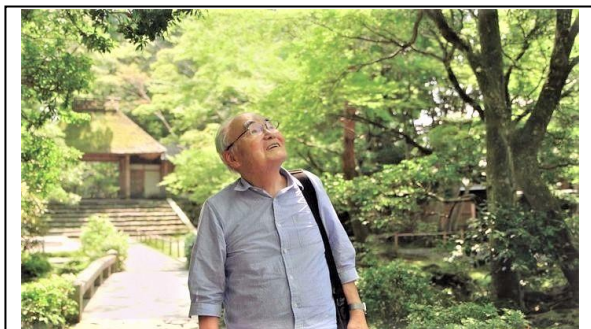
後年再会した小学校同窓生によると、その日僕は泣きながら毒をのませた様子を話したらしい。

心身共に不調だった母が荷車に横たわっていたのは覚えている。弟2人と共に貨物列車に乗せた。引き揚げ船出発地、現在の遼寧省の葫蘆島に到着。病院で、母は畳の上に寝かされた。処方された薬を母はのんでいたがある日、僕は別の粉漿を医師から渡された。

僕がのませると、母は泡を吹いて死んでしまった。ぼうぜんとした僕。通夜で弟2人と僕は黙りこんだ。8月、3人で父母のふる里、京都へ。祖母の懐に飛び込んだが、上の弟はすぐに病死。

今、75歳の下の弟と私。安保法制や、昔の治安維持法を想起させる「共謀罪」法案に反対だ。「誰の子どもも殺させない。いつまでも平和を」と声を上げ続けている。

引き揚げが決まったものの、長い道中、幼子は連れて帰ることはできないということになったのでしよう。
母親も少しは抵抗したかもしれない。
でも、結局は断ることができなかった
父親が徴兵され、母親が物売りに出るなか、妹のお守りを任されていた。
いつも背中に乗せていたからなのか、表情の記憶はあまりない。
毒を飲ませた時の表情しか、覚えていないんですよ。
そしてそれが、忘れられない。
小さな亡骸は、家のすぐ近くの川沿いに土葬をした。



2019年に京都の法然寺で。村上さんは今年89歳を迎えた。日本に戻ってからどのような人生を送ったのだろうか

母の最期・・・1946年7月7日、列車で四平を発った。
そこからの記憶は途切れ途切れだ。
ただ、娘を失った母親はみるみる衰弱し、立つことすらまもなくなくなっていた。
無蓋列車にシートを被せた車両のなかで、じっと横になった母親は、『芙美子、芙美子』と（1カ月前に殺された娘の名を叫び）、うなされていました
約400キロ、数日間を列車に揺られ、引き揚げをする日本人が集められた葫蘆島（いまの遼寧省）へたどり着くと、母親は病院に収容された。
弟とともに看病をしていたが、会話もできないほど弱り切っていた。
1946年8月6日。医者から普段とは違う粉薬を手渡された。
私がそれを口に流し込むと、母親はすぐに口から白い泡を吹き出して、息を引き取った。
引き揚げ船に乗ってから亡くなる人は多かった。
なんども水葬を見ましたからね。
病気だった母親は、旅を乗り切れないという医師の判断で、安楽死させられたのでしょう。
2人の弟たちとともに、遺体の側に横たわった記憶がある。
34歳だった母親を、海が見える小高い丘に埋めた。
周囲にも同じように、穴を埋めたあとがあった。
串いのように流れた汽笛の音は、いまでも耳に残っている。
母を失ってから、泣いたり慟哭したりした記憶が、一切ないんですよ。
感情が奪われていたのかもしれない。

今月の8月15日で日本は敗戦から78年目を迎える。1931年9月18日の柳条湖事件（関東軍の自作自演。日本政府は軍部の暴走をコントロールできず）から1945年8月15日のポツダム宣言受諾までの15年戦争、太平洋戦争は日本の無条件降伏で終わった。

数年前、私は家内とドイツ旅行に行き、ベルリン近郊のポツダム会談（1945年7月17日～8月2日）の開かれたツェツィーリエンホーフ宮殿（Schloss Cecilienhof）を訪れた。5月8日にドイツが降伏したので、ベルリンの東半分もポツダムもソ連の占領下にあった。いまでも当時の建物、会議室が記念館として残る。会議室の大きな窓の先に湖が広がっていた。アメリカのトルーマン大統領、イギリスのチャーチル首相、ソ連のスターリン首相がここで日本の運命を決めたのだ。昼なお暗い森のような庭の小径を歩いていたら、彼らの誰かとすれ違うかと思った。木立ちの奥に広がる湖の水面（みなも）には夕陽が輝いていた。

毎年、6月23日に沖縄全戦没者追悼式、8月6日に広島平和式典、8月9日に長崎平和祈念式典、8月15日に全国戦没者追悼式が開かれる。必ず総理大臣が出席し、挨拶を述べる。岸田首相の挨拶は官僚の作文を読み上げるだけで、誠意の全くない空虚な言葉が夏空に響く。昨年2022年の沖縄全戦没者追悼式で、岸田首相は県民から「帰れ」の怒号、罵声を浴びた。挨拶で戦争の反省を語らず、沖縄の軍事基地を増強すると語った。平和を望まず、戦争を望む自民党政権。この自民党政権を望み選んだのは日本国民だが、自民党政権が続けば、日本国民の誰もが戦前の満蒙開拓民、沖縄県民と同じ運命を経験することになるだろう。（横井幸夫 元東レ株式会社）